（熊本県立北稜）高等学校　平成28年度学校評価計画表

1　学校教育目標

「教育は人なり」の理念のもと、「率先垂範、師弟同行」を旨として、全職員相互の研鑽及び指導法の創意工夫を図り、一人一人の生徒の健全育成に邁進する。

1　伝統ある校風の継承と創造　　2特色ある総合高校づくり
3　学力の充実と個に応じた進路指導　　4教育環境づくりの推進
5　人権教育の推進　　6安全教育の推進
7　地域社会から信頼される学校づくり

2　本年度の重点目標

1　愛情ある生徒指導　2　基礎学力の定着　3　個に応じた進路指導
4　美しい環境作り　5　安全教育の推進　6　家庭・地域社会との連携強化

3　自己評価総括表

評価項目 大項目	評価項目 小項目	評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
学校経営	職員の資質向上	教科指導力の向上	学習意欲を喚起する充実した授業展開を工夫し、基礎学力の定着を図る。	・研究授業や公開授業を毎学期実施し、合評会や研究協議を行い、相互に研鑽する。また、参観を積極的に促す。	B	本校での公開授業週間では、各教科の先生方を中心とした参観がなされた。また近隣の中学校や高校での公開授業にも参加した。
		生徒指導力の向上	生徒一人一人の理解に努め、人格形成を支援する。	・中学校との連携強化、生徒情報の共有、カウンセリングマインドの養成。	A	担任や副担任をはじめ、各学年で教育的愛情を持って、粘り強い指導ができている。しかし、整容や生活面で再々注意をしなければならない生徒もいるのが現状である。生徒自身が納得し理解して対処できるよう、丁寧な心の教育が必要である。
		保護者との信頼関係の構築	保護者と積極的にコミュニケーションを図り、信頼を得られるよう、教育実践を使命感を持って行う。	・課題を先送りにせずに、迅速かつ組織的に対応する。特に配慮を要する生徒や困り感のある生徒には個々に応じた誠実な対応を心がける。	B	進んで明るく、元気な挨拶ができる生徒が増えているが、まだまだ十分とは言えない。保護者や地域の方々に積極的に気持ちの良い挨拶ができるよう、生徒会を中心とした、挨拶運動等の活動が必要である。
	開かれた学校づくり	保護者・地域住民との連携	県立高校魅力創造発信事業の取組と積極的な推進を図り魅力ある総合高校の情報発信を行う。また、学校行事に保護者等に多く参加してもらう手立てを考察し、地域からの要請にできる限り応じながら学校の取組を理解してもらう。総会・学年総会等の出席率７０％以上を目指す。	・中高連携や高大連携及び企業間交流を実施する。 ・学校の行事や学習の成果などについて、ホームページ上のブログを毎日更新する。 ・農産物の販売や奉仕作業など、地域住民に生徒の活躍する姿を見ていただく機会を増やす。 ・各学科ごとに中学校との交流事業を実施する。 ・田んぼアートの取組	A	ホームページについては随時更新し、ブログ（北稜日記）についても生徒の様子を日々発信できており、アクセスも増加している。農産物の販売・田んぼアートプロジェクト・地域イベントへの参加・ボランティア活動など、積極的に地域間連携に取り組んでいる。今後は、地域の方々や中学生の参加型の企画を検討が必要である。
学力向上	学習習慣の育成	基礎学力の定着	北稜タイムで「マナトレ」を有効に活用し、学習に落ち着いて取り組む雰囲気を醸成する。	・週末には家庭学習の課題を与えて普通教科の学力向上を図る。 ・専門教科でも参観しやすいよう共通主題を設定する。	A	１年生はマナトレ、２年生は読書に取り組み、朝からの落ち着いた雰囲気でスタートしている。３年生は国語・数学・英語の３教科を中心に取り組み、進路決定にもつながっていると考えられる。
	学力の向上	個別指導や発展的な学習指導の推進	授業が分からない生徒へは、個別に積極的に取り組む。欠点科目保持者をゼロに近づける。	・考査前指導、個人指導を充実させる。 ・欠点科目保持者には長期休業中に学習会を実施して、理解力の向上に努める。	B	考査前は、各学年を中心に学習会を実施している。欠点者に対しては、夏休み・冬休みに学習会を行い、個別に指導を行った。取り組む生徒の意欲をいかに出させるかが今後の課題である。
			発展的な学習をしようとする意欲を喚起する。	・土曜学習会や模試・検定試験に積極的に取り組ませる。	B	検定については、各係からの呼びかけに対して積極的に受検しようとする意欲が見られる。その後の取り組みを合格につなげていくことが今後の課題である。
キャリヤ教育（進路指導）	進路意識の啓発	進路の早期決定と目的意識の啓発	各学年・各学科の連携と継続した進路指導の展開と全職員によるキャリアカウンセリングの実施。	・年間を通し職員に対するキャリアカウンセリングの啓発的活動。 ・進学ガイダンス、職場見学、インターンシップ、オープンキャンパス等に積極的な参加。	B	地場企業とのマッチングセミナー等の参加計画や進路ガイダンス等の参加を生徒に促して進路意識の醸成に努め、一定の効果があったと考える。ただ、各学科との協力体制や系統立てた計画の必要性を考えている。
	進路希望の達成	進路目標実現の進路保障	就職・進学体制の確立と進路目標達成１００％を目指す。	・学力検討委員会おいて情報の共有化を図り、組織として進路指導にあたる。 ・受験対策のため、進路目的別の課外とともに個別指導の充実を図る。 ・企業訪問を積極的に行い、そこで得た情報を生徒への指導、支援に活かす。	B	就職に関しては、昨年度と比較すると一次の不調者がやや増えたが、就職環境の好調もありおおむね順調だった。指導・支援については、キャリアサポーターの勤務が週２～３日に減少した影響がかなりあったと感じている。進学については、今年も国公立大学進学者を出すことができ、不調者も少なかった。

評価項目 大項目	評価項目 小項目	評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
生徒指導	基本的生活習慣の確立	清々しい整容	整容指導にかかる継続指導の対象者をなくす。	・整容指導に対する統一した意識を全職員が持ち、厳しい中にも愛情を持って粘り強く指導する。	B	担任をはじめ各学年で愛情を持って粘り強い指導ができている。そのお陰もあり、再・再々検査に該当する生徒がかなり減少し、特別保護者会の該当者は１年生数名に留まっている。学年による指導のあり方に若干の差があるので、統一していきたい。
		マナーの向上	あいさつや目上の人への言葉遣い・正しい道徳を身に付けさせる。 携帯電話の利用についてのマナー向上を意識付ける。	・積極的なあいさつや公共の場におけるマナー向上を機会あるごとに指導する。 ・「携帯電話利用ルール五箇条」を遵守するよう生徒会中心に呼び掛ける。	B	風紀委員による挨拶運動などを実施しているが、満足のいく結果には、つながっていない。ＴＰＯをわきまえた言葉遣いには課題が残る。携帯電話利用ルール五箇条の周知徹底については生徒会で方法を検討中である。
		新制服着こなしの徹底・確立	地域の皆様から愛されるような清々しい着こなしを目指す。	・本校の先輩方や地域の方々に対し、学校行事等の機会に旧制服はもちろん新制服を着こなしている姿をみてもらい、アピールする。	B	歴史ある旧制服と共に、創立７０周年を機として新制服を採用し２年目となる。企業様より着こなしセミナーを実施してもらうなどしており、落ち着いた格好で学校生活を送っている。様々な意見を集約し、地域の認知も図りながら、親しみをもたれる着こなしを徹底させていきたい。
人権教育の推進	学校全体で取り組む人権・同和教育	人権教育の内容の充実	人権意識の確立を促す。 授業や部活動、学校行事などの校内での生徒との関わりのみならず、家庭での様子を把握し、生徒を多面的に理解し、生徒と向き合う時間を確保する。	・最も大切なものは日々の授業であり、クラスや部活動、掃除や学校行事などの関わりの中で常に生徒達の人権を大切にした関わりの積み重ねである。 ・講演会や人権学習ＬＨＲを通し、人権について考える機会を重ねていく。	B	各学期の人権学習LHRでは担任の先生が自分を語る取り組みや「言わない、書かない、提出しない取組」、部落問題学習(DVD視聴）、ハンセン病問題、水俣病問題などを実施し、人権講話も実施した。ただそれらの学びが単発で終わってしまっていないか省みる。自らを見つめ、自分と重ねて考える学びの構築が課題である。
		職員研修の充実	人権・同和教育に関する研修を通して人権感覚を磨き、人権意識を高める。また、スクールカウンセラーの協力を得て、カウンセリングマインドを養う職員研修を実施する。	・生徒に寄り添い、保護者や中学校等関係機関と繋がり、生徒を多面的に理解し、人権感覚を磨くための講演会や講話を実施するとともに、様々な人権教育の研修会への参加を促す。	B	人権教育に関する校内研修（生徒理解を含め）を年間で６回実施し、全員レポート研修も実施できた。校外での研修（６月荒玉地区人権同和教育集会、７月長洲玉東ブロック人権同和教育研、２月荒玉地区進路保障研）にも多くの職員が参加できた。スクールカウンセラーにはいじめ防止会議（各学期に一度）に出席して頂き、研修を行うことができた。
		特別支援教育の体制づくり	心身に課題を抱える生徒の支援を行い、学校への適応を促す。	・職員の共通理解のもと、スクールカウンセラーとの連携をさらに強化し、組織的に指導できる体制を確立する。また、関係機関との連携を強化する。	B	年度当初の定期的な生徒理解研修、支援学校からの巡回指導、ＳＣと校内の担当者との連携など昨年に続いて取り組むことができた。昨年度の課題であった「個別支援（指導）計画」に基づいた支援体制つくりの一歩を踏み出した。その充実に取り組みたい。
いじめ防止等	すべての生徒に、いじめのない安心して生活できる環境の確立	いじめを早期発見できる体制づくり	日常生活で生徒としっかりコミュニケーションをとり、生徒の様子を的確に把握する。そして生徒の変化に気付き、職員間で情報を共有し、担任を中心に早期に対応する。	・アンケートを年に３回実施し、生徒状況の把握に努める。 ・人権教育とリンクさせ、生徒の心のきずなを深められるような講演等を行う。 ・学年団による情報交換を定例化し、管理職に報告する。	B	定)を実施し、いじめの予防、早期発見、早期対応を心がけた結果、昨年度に比べいじめ事案が半分以下に減少した。また、生徒のいじめなくそう委員会では「北稜高校版心のきずなを深める五箇条」を作成、北稜祭(文化祭)で発表した。今後美術部と協力し五箇条のポスターを作成し、各教室に掲示していじめ撲滅の啓発に取り組むことにしている。 いじめ事案の数値は減少しているが、潜在している事案がないとは限らない。相談できる場所や場面や環境の整備が求められる。
		いじめを早期解決する組織づくり	常に最悪の事態を想定し、担任、学年団を中心に組織的な対応を図る。		A	各学年の担任会では週1回生徒の情報交換を行い、学年全体で対応している。各学年の情報は月1回開催する人権教育推進委員会に集約され、必要に応じて各部に協力を要請する。また、各学期末にはスクールカウンセラーも含めたいじめ防止対策会議を開催し、それぞれの事案に対する対応について検証し、次学期に生かすよう心がけている。
安全管理	学校の安全と危機管理の徹底	教職員の共通理解	安全教育・安全管理体制を確立する。また、不測の事態に備えた対応について理解させる。	・安全(防犯)教育・防災教育を実施する。 ・教職員の研修会を実施する。	B	避難訓練年間2回実施(地震･火災)し、消火器、室内消火栓の取り扱い方法の実演を行う。職員心肺蘇生法研修。AEDの使用方法と共に実施。全職員の8割の参加を目標としたい。
		実行ある安全管理マニュアルの策定	安全教育・安全管理体制を確立する。また、不測の事態に備えた対応について理解させる。施設・設備の点検整備と教職員による校舎内外の巡視。	・安全(防犯)教育や防災教育を実施する。 ・教職員の研修会を実施する。 ・安全管理マニュアル（救急対応等)の理解と周知を図り、定期的な安全確認(安全点検)を行う。	B	安全点検学期に1回実施。 各職員掃除区域の点検を行い、危険、破損、故障している場所の確認をした。その後、補修を行っている。点検項目の見直しと精選が必要。

4　学校関係者評価
(1)指導全般(学校評価)について ①　学校評価表については、各項目について努力がうかがえる。人権教育やいじめ防止及び特別支援教育等のサポートなどの改善が見られる。 ②　概ね良好な評価であり、先生方の頑張りが見える。 ③　自己評価は難しい面もあるが、実効性の高い評価をしていただき、必要な取り組みをお願いしたい。 ④　保護者に育友会行事や学校行事等のことがあまり伝わっていないところもあるため、何か工夫が必要である。 ⑤　細部にわたり成果と課題の分析がなされ好感がもたれる。 ⑥　1年の時から進路について考える機会があった方がよく、進路指導部の次年度に向けた取り組みが必要である。 (2)情報発信(魅力ある学校づくり)等について ①　4校合同説明会の効果は大きく、分析されながら続けるとよい。各中学校への配布物・紹介DVDなど、直接中学校への発信が効果的である。 ②　十分に発信してあると感じている。粘り強く発信していくことや育友会からの働きかけも有効である。 ③　開かれた学校づくりを通して、総合高校としてのアピールが大切であり、文化・スポーツ面等の活躍と併せて発信をお願いしたい。 ④　チラシ、DVD製作など、取り組まれていると感じた。学校に足を運んでもらって、どのような教育があっているか知ってもらうことが大切である。 (3)部活動の活性化 ①　全国大会等への出場種目も増え、素晴らしい成績であり、今後も技術向上を目指して欲しい。 ②　生徒数に対して部活動の数が多すぎるように感じることから精選も必要である。 ③　予算も人材も大変だと思うが、部活動の環境も生徒を変えていく大切な要因であり、顧問の先生方の奮起を期待したい。 ④　それぞれの部活動がやり方を見直し、バランスの良い、内容の充実を図る必要がある。

5　総合評価
学習指導や進路指導、生徒指導や学校行事、人権教育や特別支援教育等の主な本校の教育活動に対して一定の評価をいただいた。しかしながら、保護者と生徒の関係が複雑化し、これまでの学校側からの支援だけでは、難しい問題や課題がある。 保護者のアンケートからは、「学校は、生徒の家庭環境の理解に努め、それらを踏まえて生徒に適切に対応している。」との問いに対し、「そう思う」が22．3%、「だいたいそう思う」が64．2%、「あまりそう思わない」が11．6%となっている。また、「 学校は生徒の進路希望が達成できるよう、適切な指導を行っている。」との問いに対し、「そう思う」が30．6%、「だいたいそう思う」が59．0%、「あまりそう思わない」が9．9%となっている。このことから、保護のニーズが高い分野に概ね対応できているが、対応が不十分に感じている保護者もおられることから、一人一人を大切にしていく視点に立った教育をどう取り組ん行くかが次年度へ向けた今後の課題である。 そのほか、生徒の活躍についても、各種競技大会における全国大会や九州大会への出場、各種検定資格取得へのチャレンジや各行事への積極的な参加など随所にうかがえる。しかしながら、若干名ではあるが、学習面や生活面等に課題を抱えている生徒をどのように支援・サポートし、より良い方向へ導いて行くかが今後の課題である。

6　次年度への課題・改善方法
進路の自己実現の達成としての進路保障が大きな目標の柱である。そのためにも、基本的生活習慣の確立と基礎学力の向上が必要である。学習面については、授業の工夫改善の視点に立った 「アクティブラーニング」等の手法を取り入れた授業の展開が必要であり、教職員の更なる授業力の向上や専門性のスキルアップを図るための職員研修や積極的な授業参観等が望まれる。 また、整容や挨拶の励行の徹底が必要であり、「地域に根ざし、地域から信頼される学校」を目指して行かなければならない。 特に、特色ある総合高校(5学科)としての魅力を中学生や保護者及び中学校関係者に、どのような方法で効果的なPRができるのか、次年度へ向けての大きな課題であり、進路指導の充実や部活動の活性化、地元地域や中学校との連携等の積極的な推進体制づくりに取り組んで行かなければならない。